

2011.9.24

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

Newsletter



言語チームリーダーに就任して

言語教育科目構想・運営チームリーダー／本学異文化コミュニケーション学部教授 新野 守広

今年は5月上旬からの授業開始という変則的な新学期を迎えました。もちろん東日本大震災の影響です。ところで、北関東で育った私は知人たちの安否が気がかりでしたが、それが確認された後も落ち着かず、交通機関がある程度復旧した4月から5月にかけて茨城北部や仙台を訪ね、連休中には瓦礫と化した石巻市沿岸部に行きました。東京から半日かけて移動すると、実につらい風景が広がっていました。無人の廃墟となった住宅地に、夫婦、親子連れ、家族連れがぼつんと立ち尽くす姿は忘れられません。

この事実と共存する形で始まる新学期とは何か。私たちは誰もが心の中で問いかけながら新学期を迎えました。これほどの緊張と不安を抱いて新学期を迎えることはこれまで絶えてなく、もちろんこれからも決してないでしょう。どういう表情で新入生を迎えたら良いのか。授業の始まりにあたってなにを語るべきか。原発にどういう態度をとるか。多くの教員は、答えのない問いを考えることを余儀なくされたはずです。

ところが実際に新学期が始まると、新入生たちは総じて明るく、拍子抜けするほどわがままで、自分勝手な要求も多い。いわば屈託のない彼ら彼女たちの姿に接した瞬間、なにか途方もなく嬉しかったのを覚えています。けれどもそれは、決して底抜けの明るさではない。新入生たちも私たちも非常な集中を無意識にかかえているために、すぐに疲労感に反転しかねない。そのようなきわどい状況を生きているという意識が、5月から7月までの教室に共有されてはいなかったのでしょうか。この原稿はちょうど前期授業が終了した翌日の7月22日に書いています。息もつかず、無我夢中で駆け抜けた。このように書くときと誇張気味にも聞こえますが、長いようであったという間に終わった2011年度前期の実感は、ある程度の誇張なしには語れないのではないのでしょうか。

ここ数年の全カリ言語カリキュラムには、大きな変化がありました。2010年度入学者から言語の必修単位が少

なくなり、全学部・全学科一律に言語A(英語)が6単位、言語B(ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ロシア語、日本語)が4単位になりました。英語は、英語ディスカッション、英語ライティング、英語プレゼンテーション、英語eラーニングの4科目が必修科目になりましたが、これ以上の一層の英語力をめざす学生には、言語副専攻(英語)科目が自由科目として開設されました。

言語副専攻(英語)では、1年次に履修した必修科目6単位はステージ1としてカウントされます。続くステージ2には、インテンシブ・コース(16単位)やインディペンデント・コース(16単位)が開設され、さらに上のステージ3にはアドバンスト・コース(8単位)が開設されています。その上のステージ4にはオナーズ・コース(8単位)という最上級コースが用意されました。それぞれのコースの修了要件単位数を満たすと、言語副専攻(英語)各コースの修了認定が申請できます。

言語Bにも言語副専攻は開設されています。1年次の言語B必修科目4単位を修得した後、さらにそれぞれの言語の履修を希望する学生は、まず基礎科目(4単位)を履修し、続いてコア科目(8単位)を履修します。これに別途履修する言語副専攻関連科目(4単位)を加えると、言語副専攻修了認定が申請できます。

以上のように大きく変わった言語カリキュラムは、言語Aと言語Bの語学力を大きく伸ばすのが目標です。聞く・話す・読む・書くという言語の4技能を鍛えて総合的に発展させることで、各言語の技能検定試験などの点数の上昇も期待できます。今年のように開設まもない時期には、学生の履修希望はTOEFL講座やTOEIC講座といった資格試験準備科目に集中しがちですが、言語副専攻の制度が軌道に乗り、語学力の発展にはなにが必要かを多くの学生が理解して4技能を地道に鍛えるようになれば、カリキュラム改訂後の現在の言語A・言語B科目群で立教生に必要な語学力研鑽の場を支えられると考えています。

目次

言語チームリーダーに就任して.....	新野守広 (1)
新メンバー紹介.....	藤田保/飯島みどり/中島俊克/安松幹展 (2)
全カリ科目を担当して(言語教育科目・総合教育科目).....	野口岳史/岡田直樹/細野昌子/辻英之 (4)
学生として見た全カリ、職員として見た全カリ.....	三股恭子 (7)
2011年度全学共通カリキュラム運営センター 名簿.....	(8)

【新メンバー紹介】

就任のご挨拶

英語教育研究室主任／本学異文化コミュニケーション学部教授 藤田 保

2011年4月より英語教育研究室主任となりました藤田です。よろしくお願ひいたします。

立教大学における1年次を対象とした英語必修カリキュラムは2010年度より新しいカリキュラムに移行しました。その科目の構成は、読解力とリスニング力を伸ばし、文法の復習や語彙力増強を狙いながら、自律的な学習者の育成を目指す「英語eラーニング」、8名程度の少人数でディスカッションをするのに必要なスキルを身につけ、最終的には英語だけで討議する力の養成を目指す「英語ディスカッション」、英語ディスカッションのクラスで扱われた社会的なテーマを共有することで内容的な深化を目指しながら、声の出し方から論旨の組み立て方までプレゼンテーションに必要な技術を学んでいく「英語プレゼンテーション」、そしてパラグラフの構成の仕方から始め、最終的にはリサーチ・ペーパーを英語で書けるようにすることを旨とした「英語ライティング」の4科目から成り立っています。

これらのクラスはプレースメントテストの結果に基づいて能力別のクラス分けがなされており、受講学生それぞれのレベルに合った授業を受けることになります。2011年度からは履修免除（単位認定）制度も始まり、入学前に外部公式試験によって一定の英語力を持っていることを示すことができれば英語必修科目の履修が免除されます。なお、今年度は39名の学生が免除されています。

これらの必修科目に加えて、2011年度からは2年次生以上を主たる対象とした英語副専攻カリキュラムもスタートしています。

1年次の必修カリキュラムをステージ1とし、ステージ2として「インテンシブ・コース」と「インディペンデント・コース」があり、さらにステージ3の「アドバンスト・コース」、そしてステージ4の「オナーズ・コース」と標準的なレベルの英語コミュニケーション能力の育成から海外留学や仕事で使える高度な英語力の育成まで、学生一人ひとりが自らのレベルと必要性に応じて卒業までの在学期間中を通して英語力の向上や維持を目指しています。

初年度となる2011年度の前期は履修のための抽選の競争率が10倍以上にもなる科目がいくつも出るほどの盛況ぶりで、学生たちの関心の高さが伺われます。2012年度からは、今年度にはほとんど開講されていなかったステージ3・4の科目群も開講され、言語副専攻（英語）カリキュラムがフル開講になります。今後の履修状況等についてはさらに注視する必要があるだろうと考えています。

これらのカリキュラム全体で、英語は2千数百コマの授業が展開されており、それに関わる専任教員、教育講師、ディスカッション講師、兼任講師の数も200名近くに達します。この大所帯を統括する英語教育研究室を運営していくには大変な労力が必要です。皆さまの御理解と御協力をお願いしつつ、就任の挨拶に代えさせていただきます。

星に願いを

スペイン語教育研究室主任／本学異文化コミュニケーション学部准教授 飯島 みどり

「新メンバー」と呼ばれるには臺^{とう}が立ちすぎているとはいえ、昨年度お休みを頂いていた事情も手伝い、言語B4単位化を含む新体制にまだ慣れ切っていない言語チーム新入りより、若干の御挨拶を…。

もっぱら近現代史を軸としたラテンアメリカ地域研究に携わってきた身からすると、近年この社会がラテンアメリカ化^{ニホン}してきているのでは、と思われるふしがある。それは同地域出身住民が周囲が増えてきたからではなく、改めて識字能力^{リテラシー}が問われる時代の到来、という意味において。

御存知の通り、スペイン語人口の9割はアメリカ大陸に生きている。しかし人口とは話者人口のことであって、スペイン語を話す人々がもれなく書記文字体系としてのスペイン語を操れるとは限らない—このような現実筆者はしばしば直面してきた。自分の名前を何とかアルファベット表記することはできても、役所の手続き文書や薬の能書きなどを読みこなすことはおろか、例えば己れの姓 García は隣人の姓 Gutiérrez より前なのか後なのかかわからない、abcの順序が頭に入っていない、即ち一覧表の中から自分の名を探し出せない「ふつうの人々」の多さ。文字を操る／身につけるといふ行為は同時に、ある体系秩序、ある世界観を自分のものとする／先の例は自らに刷り込む過程なのだということがよくわかる。

教育の機会が隔々にまで行き渡らない社会の現象—従来は筆者もそのように解釈してきた。日本に限らず「文字社会」の盤石な歴史を有する東アジアには無縁と映る現象だろう。ところがここ何年か、電子辞書の普及を懸念する教員たちからこんな声が寄せられるようになった。

一教室で学生たちに紙の辞書を引かせると、目指す単語にたどり着くのにとんでもなく時間がかかる。様子を見てみると、柱（欄外見出し）から見当をつけてゆくことをせず、頁の端から単語をひとつひとつ眺めていっている。これでは時間がかかるのも当たり前だと合点した。

現在は辛うじて過渡期である。しかし早晚、日本語や英語の辞書—実際に目で見ることのできる質量の世界—すら手に取ったことのない世代がやってくる。彼らにとって単語とは、ひとつひとつその都度釣り上げられる破片であって、前後左右天地に相互関係をもつ有機的存在=秩序の一部ではなくなっているだろう。そこに筆者は既視感を覚えるのである。

夜空を見上げては、本来無関係(?)なはずの星々に星座という物語を与えた人間たちがいた。彼らは科学技術を駆使したわけではない。バラバラに見える光の粒を熊なり豎琴へと編み上げたのは人間の想像力である。機械の利便性により切断された星々を再び繋ぎ合わせるリテラシーの構築こそ、人文学（ことばの手習い）を核とするリベラル・アーツの重要な任務と考えてみたい昨今である。

三度目の正直

総合教育科目構想・運営チームメンバー／本学経済学部教授 中島 俊克

このたび全カリ総合チームメンバーを拝命した中島俊克です。宜しくお願いします。

私が立教に赴任したのは15年ほど前ですが、直後に1年間だけ、ピンチヒッターとして言語の方の専門委員になったのが、私と全カリとの出会いです。まだ発足間もない頃で会議の数が多く、機構の複雑さに目を回したのを覚えています。その後しばらく全カリとは縁が切れていたのですが、最初の長期留学から帰国したあと、次の留学に発つ2008年3月まで数年に亘り、運営委員・特別教務委員・専門委員として、総合の方でお世話になりました。従って今回が3度目のご奉公です。科目も2004年度以降、継続して総合Aを持たせて頂いているので、私の立教での生活はほとんど全カリと共にあったと言えます。

私は経済学部に所属しているながら歴史が専門なので、自分の研究自体がかなり学際的です。そのためあって、専門の枠を外して学生の知的好奇心を満たすという全カリの考え方には共感するところが大きく、自分の全カリ担当科目（「歴史と現代」など）でも大いに羽根を伸ばさせてもらっています。もともと私大文系の学生は、ごく少数の司法試験・会計士試験受験者以外は、「専門家」になることを目標に学生になったわけではなく、専門分野への学習動機が強くないのが一般的です。しかし教学権は学部教授会にあるので、放っておくとカリキュラムは専門知識の詰め込みに傾き、学生が求めているものとの間に乖離が生じがちです。全カリ総合は、うまく組織すれば、この空隙を埋める絶好のしくみになり得ると考えます。まだ旧一般教育部の残像が残っていた頃は、お子さまランチ的な「教養セット」のお仕着せを脱しきれない面があったものの、時が経つうちに、学生の知的好奇心の自由な展開を促すという、本来の目的に添った形が徐々にできあがってきたように思います。今回の改革は、面白さを追求するあまりやや雑駁になってしまった科目編成を、もう一度アカデミックなものへとひき締め直すねらいがあるようですが、中規模大学の利点を生かして、専任教員自身が担い手となり学際的な教育を追求するという、全カリ総合発足時の理念だけは、忘れずにいたいものだと、常々考えています。

とは言え、言うは易く行うは難いということは、経験から身にしみています。前回委員をやっていたときの私の仕事の大部分はいわゆる大人教科目対策でした。事務方の名人芸的な時間割編成スキルに支えられての、綱渡りのような毎日でした。当時より現在では学生数が格段に増えていることを考えると、空恐ろしくなります。全学部の全学生が自由に科目を取れるという全カリ総合のしくみは、もうほとんど限界に近づいているのかもしれませんが、けれどももしこれが消えたら、立教は立教でなくなるのでしょうか。教育への熱い情熱をたぎらせるリーダーはじめスタッフの皆さんと一緒に、力の続く限り頑張りたいと思います。

総合教育科目構想・運営チームに復帰して

総合教育科目構想・運営チームメンバー／本学コミュニティ福祉学部教授 安松 幹展

この度、沼澤秀雄先生（コミュニティ福祉学部）の後任として、総合教育科目構想・運営チームに復帰することになりました。「復帰」と記しましたが、正確には、全学共通カリキュラム（全カリ）の総合教育科目専門委員を2004～2007年度に務めて以来の復帰ということになります。当時も、総合教育科目の2006年度カリキュラム改編にむけた作業を行っており、「カリ改編男」として、チームに貢献できたと考えています。当時の私は、2012年度から「立教B（立教ゼミナール）」に改称される「立教生の学び方」の立ち上げに向けた検討グループの座長を任命されました。この科目群の検討は、「現代の学生の基礎学力の低下や、学ぶ意味や意欲の喪失などの問題に対応するため（「2006年度以降総合教育科目カリキュラムの枠組みに関する提案」（2004年9月）より）に開始されました。しかし、検討が進む中で、全学年が履修可能な全カリでは「学びの基礎」の要素を濃くした科目はそぐわないことが確認され、むしろ、全学部全学年が混じり合って履修できる利点を生かした科目群にできないかという結論に至りました。そこで、当初は廃止予定であった「～演習」を継続し、自分の専門領域（所属学部）にとらわれない広い視野を持って、少人数で議論できる場を全カリに維持していくことにしたのです。2012年度カリキュラム改編でも、全カリの中に、ゼミナール形式の少人数科目が存続していることに、立教大学の教育に対する懐の深さを感じる次第です。

一方で、私が主に担当する総合A科目（2012年度から「主題別A」に改称）の「心身への着目」カテゴリーでは、大人数授業に対する問題は当時から存在していました。私も、当時800名を超える授業（スポーツの科学）をタッカーホールで担当し、静粛性の保持と、スポーツ科学を単なる興味から学問的レベルへ昇華させるための工夫を深く考えさせられた時期でした。すでに、授業見学によるFDが始まっており、翌年の同科目（人数は300名前後）を当時の総合部会長らに見学していただき、大人数科目に対する工夫を議論する機会も得ました。

また、2005年度には、特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）に「立教科目－建学の精神から学ぶ科目展開－」の申請・採択に関わるプロジェクトも重大なトピックでした。「建学の精神」に立ち返って、全カリの教育目標を再考できたのは、大変有意義な時間であったと思いますし、立教大学に赴任して3年目の私にとって、立教大学を構成する一員であるアイデンティティーを一気に強化することができたと感じています。

就任して最初の半期が過ぎましたが、2012年度カリキュラム運用に向けた議論の中で、これまでの経験を十分に発揮できていないと反省しています。メンバーの一員として、立教大学のアイデンティティーを感じながら、新カリキュラム運用に向けて貢献できればと思います。

【全カリ科目を担当して（言語教育科目）】

「日本手話」という講義について

本学兼任講師 野口 岳史

「日本手話は日本語とは異なる言語である。」「日本手話」のオリエンテーションでそう説明すると、ほとんどの履修者が驚く。日本手話は、音声言語ではなく視覚的言語である為、言語を習得するまでのプロセスが他の言語とは大きく違っている。例えば、日本人が日本語を習得する場合、「聞く→話す（音声的）→読む・書く」という手順で習得していく。日本手話の場合は、「見る→話す（視覚的）→映像を見る・映像を撮る」という手順になる。日本語の入口が「聞く日本語」であることに対して、日本手話は「手話を見る」ことから始まるのである。つまり、手話を習得する為には、何よりも見る事が重要になる。日本手話履修者（聴者）にとっては、目で新しい言語を知るという事は、今まで味わったことのない経験である。今まで耳から多くの情報を得てきた為、「1時間半も先生の顔を見続けたのは初めてです。」という学生からの感想が聞かれた。



講義は昨年度から開設し、今年度は2年目である。講義は1から4まであり、現在、池袋キャンパスは日本手話3が終了したばかりである。授業は「手話実技」と「情報提供」に大きく分かれるが、実技は日本手話で日本手話を教えるというナチュラルアプローチ法で行っている。「実技」はまったく声がない1時間の講義となる。質疑応答やコラムの時間を設け、履修者に「情報提供」を行っているが、この30分間は読み取り通訳が付く。日本手話1から3を通して履修してきた学生が何人かいる。彼らは1週間に1回という言語習得には困難な条件にも関わらず、日本手話文法を身につけながら、ろう者（耳のきこえない人）とのコミュニケーションがとれる言語力がついていると感じている。日本手話2では全国手話検定3級合格者が1名いたが、今後、受験予定の履修者が現段階で複数いる。



「日本手話3」授業風景

日本国内の聴覚障害者は約36万人いるとされている。その中にろう者、難聴者、中途失聴者と大きく分類され、日本手話を母語としているのは、ろう者であること、また、耳がきこえないからと言って全員が日本手話を使っているのではないということも知識として紹介してきた。

現状では、日本手話とは異なる日本語対応手話を教える講習会は多いが、言語として日本手話を学べる場所は少ない。日本語対応手話は、日本語の文法、語順に即して手話の単語を当てはめていく為、日本語に近い。現在、国連の障害者権利条約では「手話を言語として認める」と定めているが、日本は正式にまだ認めていない。そんな日本社会の状況下、立教大学では言語教育科目として「日本手話」が開設された。福祉関連科目として手話を取り入れる大学は多数あるが、言語としては日本国内では、ごく僅かにとどまっている。その影響からか、立教大学では「手話を覚えて耳のきこえない人を助けてあげよう」という福祉的な見方ではなく、「ろう者のことを知りたい、手話をもっと覚えたい」という受講生が多い。

個人的には講師として、履修者が手話を通して自分の人生に新しい見方を構築することを願っている。また、2年間の講義を通して、確実に手話で会話ができる言語力を獲得できるよう指導していきたい。

(2011年度「日本手話1」「日本手話2」「日本手話3」「日本手話4」担当)

日本手話聴者講師の役割について

本学兼任講師 岡田 直樹



わたしは、新座キャンパスにおいて昨年度日本手話1・2を担当し、今年度も引き続き日本手話1を聴者講師として担当している。そこからいくつか見えた現状と展望を述べることにする。

第一に立教大学の日本手話は日本手話を母語とするろう者（ネイティブサイナー）講師が、目的言語である日本手話を日本手話で教えている。よって、手話実技のときに音声日本語はまったく介入しない。初回授業ではその授業スタイルに戸惑う学生も多いが、回数を重ねるごとに慣れて音声に頼ることなく手話を理解し、理解を蓄積させ手話を習得していく。それとともに、本講義では、ろう文化や生活様式、価値観などをコラムという形で伝え、理解を促している。それは、立教大学全体での取り組みでもある、多文化との共生を視野に入れた「異文化理解」を深めるとともに、異質な文化に属するさまざまな人々とコミュニケーションすることのできる「言語運用能力」を修得することを目的としているからだ。コラムを通して自身の聴文化との比較を

学生自身が意識し、視野を広げることができた。学生の感想を抜粋すると～①「耳が聞こえないことで怖い体験をしましたか?」と質問しましたが、それは「ろう者はかわいそうだな」という思いがどこかにあったからなのかと思い恥ずかしくなりました。社会に出る前にろう者と交流を持って良かったです。～②若葉マークのようにほかの車に注意を払ってもらおうことがろう者にとって必要ないのなら、ろう者の車が聴覚障害者マークをつけなければならないのは少し疑問を感じました。～などが感想として挙がった。聴者の視点を離れて、ろう文化という異文化の視点に思いを巡らせられた結果だと考える。このようなコラムについては、ろう者講師の手話を音声日本語に変換する通訳が聴者講師の役割の一つになる。

また、今年度は日本手話1・2の履修定員枠を5名増やし25名からのスタートとなった。それは、昨年度定員数（20名）で開講したにも関わらず最後まで履修できた学生が減ったためだ。今年度は途中で通えなくなる学生は少なく、定員に近い学生が履修をしている。そこでの新たな課題が生まれた。1名の講師ではナチュラルアプローチで教えられる人数に限界があり効果的なインタラクション（相互作用）が深まらず学生の習熟度に差がでてしまうことだ。そこで、聴者講師がろう者講師と意図的にインタラクションをしてそれを学生に見てもらい理解を促したり、聴者講師がろう者講師の手話をまねすることで、学生もつられて手を動かせる牽引的な役割を作り出した。この現状をもとに、今後、より効果的な聴者講師の役割について整理をしていきたい。(2011年度「日本手話1」「日本手話2」担当)

「日本手話」を担当して

本学兼任講師 細野 昌子



2010年度から「言語」としての日本手話が開講された。ここ一年半を動画アクセスの観点から、「学生の学習意欲」を探ると共に、立教大学での「手話の位置づけ」を考えたい。

手話は視覚的言語なので学生の「見る目」を養うことからスタートした。講義一回目のコメントシートには「目が疲れた」という声が多数あったが、これが「音のない言語」と初めて出会った学生の感想だった。講義開始と同時に指導の効率化を図る為、学生向けに講義に対応した動画配信を行った。これはメディアセンターの協力の下“V-campus Cyber Learning”という学内システムを使い実現できた。下記の表に2010年度前期・後期、および2011年度前期の動画アクセス状況をまとめた。「日本手話1」では復習中心の内容とし、後期「日本手話2」では復習編に1分位の「ストーリー」も応用編として追加した。

学習2年目の学生対象となる「日本手話3」（2011年度は池袋キャンパスで開講）では、復習編に加え学生からの質問への回答、および「コラム」として自宅用読み取り教材を配信した。コラムは「ろう教育」、「ろう者と職業」、「社会福祉制度」などのテーマで、各5分くらいの内容で情報提供も兼ねている。難易度が高いので「読み取り音声ありなし」の選択肢を与え、自分のレベルとペースに合わせて学習できるように工夫した。また復習編は、レベルアップに伴い、テーマのみ字幕をつけ、読み取りのヒントとした。更に、宿題の配信でアクセス活性化を図った。

その結果、配信1回ごとのアクセス数は、2010年度「日本手話1」:1.1回/1人、「日本手話2」:池袋キャンパス 5回/1人、新座キャンパス 2.4回/1人となり、レベルアップと共にアクセス数が上がった。さらに「日本手話3」では13.4回/1人、と飛躍的な伸びが示された。講義の進捗と共に学生の意欲が促進されていることが分かった。また今年度に入って、昨年度の教材へのアクセスも以下の表右端のように表れ、学生の積極性が見られた。

この動画配信は、メディアセンターの協力のお陰で、講義担当者の意図に沿って実現化できていることに改めて感謝している。

動画配信状況・2010年度前期～2011年度前期（2011年7月18日現在）

2010年度前期		履修者数	アクセス数	11年度のアクセス数
池袋)日本手話1	復習編:4～9コマ (8回)	17	310	31
新座)日本手話1		18		
2010年度後期		履修者数	アクセス数	11年度のアクセス数
池袋)日本手話2	復習編:4～9コマ・応用編:ストーリー 1～4コマ(9回)	17	727	60
新座)日本手話2		11	242	25
2011年度前期		履修者数	アクセス数	
池袋)日本手話3	Q&A:5分(読み取り音声ありなし) コラム:5分(読み取り音声ありなし) 復習編:4～9コマ(タイトル字幕付き) 宿題:4コマ (8回)	9	968	
新座)日本手話1		復習編:4～9コマ (7回)	23	521

次に、大学内での「手話の位置づけ」について感じたことを述べたい。2010年11月に開催された、全カリシンポジウム「大学におけるしょうがいしゃ教育」では、聴覚しょうがいしゃがテーマとして特化され、翌年2011年には「しょうがい学生支援室」が設置され、4月から専門コーディネーターが開始された。この対応の速さには、大学の目指す「急速な変化に対応し、新しい時代を拓いていく、柔軟でしなやかな知性」を感じた。

また、手話はマイノリティーの言語であるがゆえに、人権問題との関わりも深く、それに関わる大学内の活動にも参加する機会があった。ボランティアセンターやしょうがい学生支援室主催の「実践!バリアフリー講座」などで、手話や聴覚しょうがいしゃについて講演する機会を得た。それら講演の場で、「日本手話」の履修者が、ノートテイクなどで聴覚しょうがい学生への情報保障を行っている様子を見ると、講義がその枠を超えて実践に繋がっているのを実感した。他にも手話サークル“Hand Shape”が編著し出版された『はじめての手話ダンス&ソング』（1～3巻）には、監修という形で参加した。

学内での活動参加を通し「日本手話」の講義が、言語習得の場だけにとどまらず、学内のろう学生と、聞こえる学生および関係者の接点としての役割を果たしていると感じる。2006年には国連障害者権利条約（2条）で「手話は言語である」と宣言され、日本は現在、その批准に向かっていく。世界的規模のうねりの中、立教大学にある「言語としての日本手話」が、全カリの科目にあること、先駆性を尊重しながら、更なる講義内容の充実邁進したいと考えている。（2011年度「日本手話3」「日本手話4」担当）

全学共通カリキュラム 総合教育科目 総合A 1. 人間の探究「手話と人権を考える」

全学共通カリキュラムでは、手話という少数言語を話すろう者への異文化理解の姿勢をつちかい、さらに言語のバリアフリーへの理解を深めることを目的とし、総合教育科目の中において、立教科目（R科目：人権）として手話関連科目を開講しています。言語教育科目の「日本手話」は実技中心の科目ですが、「手話と人権を考える」は講義系科目です。

なお、2011年度の授業目標・内容・計画は以下の通りです。

■授業の目標

概論講義を通じて、手話という少数言語を話すろう者に対する異文化理解の姿勢をつちかうとともに、多言語共生社会を目指すための課題について学ぶ。

■授業の内容

音声言語とは異なる固有の文法をそなえた手話の言語学的な特徴や、関連する文化、歴史、社会福祉、教育、法制度、権利などについて多面的に学ぶ。また、手話を使うろう者の実際の生活について知り、職場や地域における望ましい共生のあり方を考える。

■授業計画

1 はじめに・学習の心がけ / 2 聞こえないとはどういうことか / 3 子どもの手話習得から考える「言語」としての手話 / 4 ろう者と社会制度 / 5 ろう者と仕事 / 6 「ろう文化」という思想 / 7 ろう教育と言語権 / 8 少数言語話者の気持ちを理解する / 9 ろう者と家庭・子育て / 10 異文化間摩擦を考える / 11 ろう者と医療技術 / 12 ろう者とのコミュニケーション / 13 まとめ

【全カリ科目を担当して（総合教育科目）】

『自然と人間の共生』を担当して

本学兼任講師 辻 英之

今年前期、全学共通カリキュラムの「自然と人間の共生」を担当することになりました。私は、南信州・^{ウツチカ}泰阜村において、青少年対象の山村留学や自然体験教育キャンプを仕事にするNPO（グリーンウッド自然体験教育センター）の代表をやっています。そういう立場の人が兼任講師で授業を受け持つことはこれまであまりなかったと聞いています。

泰阜村から大学まで、毎週往復10時間もかけてまで学生に伝えることがあるの？と自問自答しながら兼任講師の依頼を受けました。実は自分がいったいどのようなことを学生に伝えようとしているのかについて自分でも楽しみだったのです。

「自然と人間の共生」の授業目標は、「へき地山村に住む人々が営む自然と共存する暮らし。その暮らしに潜む教育力を学び、今求められる自然と人間の関係性を考える」ことです。泰阜村の教育力を土台にしたNPOの教育実践を紐解きながら、自然と人間の関係性について、学生自身が考えることが肝要です。

3月11日の東日本大震災を機に、全国が「自然と人間の共生」について何かを考えることになりました。その意味ではまさにタイムリーな講義内容であり、実際に、震災を機に「改めて考えたい」という理由で受講している学生もたくさんいます。新座、池袋あわせて420人超。どちらのキャンパスも、学生の想いも伝わってきますし、何より学生がまじめです。

講義後半には、ゲスト・スピーカーとして泰阜村の猟師の方を連れて行きました。彼の生い立ち、仕事、趣味、人生観、自然と向き合う作法、獣害と人間の罪など、訥々とした語り口と、鹿の角や本物の罠などを見せたり実演したり。学生は完全に引き込まれていました。

学生の感想（リアクションペーパー）には「自然を利用させていただくという謙虚な考え方が必要という言葉が印象的だった」「自然には元に戻る力があるという言葉が心に残る」など多くの心を揺さぶられる表記があり、山村で泰然と生き抜く人の生の声から、特に東日本大震災で浮き彫りになった人間と自然との関係性のあり方を、深く考えるきっかけになったのだと思います。

当の猟師さんは「普通の暮らしを話ただけだけど、伝えたいと想っていたことがけっこう伝わるもんだな。またやってもいいな」と次に向けてやる気満々です。泰阜村が持つ教育力、そして村の風土に育てられた猟師の方の持つ教育力が、学生に向けて発揮された講義でした。私も感動しました。

この「泰阜村の教育力」を、今回の東日本大震災の支援に発揮させようじゃないか、そう強く想っては

めたことが、わがNPOの震災支援プロジェクトです。自然と人間の関係性のあり方、助け合い支えあいながら生きてきた暮らし、厳しい時そこどもの教育に力を注ぐ気風…、すべて被災地に送り届けたいものばかりです。

地震、津波、原発事故、風評被害…、直面したことのない脅威にさらされて戸惑う小さな地域が東北のあちこちにあります。泰阜村の教育力を、今こそ発揮すべきと強く想うのです。

前期が始まった5月、「災害ボランティアに行きましたか？」と聞くと、手を挙げた人はゼロでした。理由を聞いてみると「一步が踏み出せない」「どうしていいかわからない」「何ができるのかと考えても結局は募金だけだった」ということでした。

若い心と身体は、社会の役に立つことを基本的に望んでいます。しかしそのとき、彼らはどう被災地や被災した人々と関わってよいかかわらなかつたのです。

それが前期が終わる7月。授業後にわざわざ私のところまで歩み寄ってきて「夏に被災地にボランティアに行きたいのですがどうすればいいですか」「被災地には行けないのですが東京でやれるボランティアはありませんか」「ゼミで募金を始めました。顔の見える送りに寄付したいのですが」「被災地出身なので、夏は故郷で児童の学習支援をします」と、次々と質問や報告が飛び交いました。

この、自分が動くことで「支援に参画している」と学生自身が想うことが大事なのです。それはそのまま、学生自身が社会に参画する契機にもなるでしょう。

泰阜村の自然の力、地域の人々の力、こどもの力、歴史の力…。泰阜村の力を総動員し、渾身の力を込めて「自然と人間がどういう関係であるべきなのか」を学生に伝えてきました。きっと伝わったことと思います。

自発的に動くこと、それが今、求められています。

前期の間、本当にありがとうございました。この場をお借りして、関係者の皆様へ深く感謝申し上げます。

（2011年度「自然と人間の共生」担当）



「自然と人間の共生」授業風景（右側が筆者）

学生として見た全カリ、 職員として見た全カリ

本学職員／教務部教務事務センター 三股 恭子

電話帳だ。初めて全カリの分厚い履修要項と講義内容を受け取った時、そう思ったことを今でも覚えています。もちろんその時は、4年後には自分がそれを作成する立場になるとは、夢にも思っていなかったのですが。

私は2006年度に観光学部に入学し、2010年度に職員として立大学院に入職、現在は池袋の教務事務センターで全学共通カリキュラム・言語教育科目の担当をしています。5年以上「全カリ」と関わっていることになりましたが、その間、カリキュラムも私の「全カリ」を見つめる視点も大きく変わったように感じています。今回は、遠い昔の話のようではありますが、学生時代に私がどのような考えで全カリを履修していたかについて、また職員として全カリ運営に携わるようになった現在について、書かせていただきたいと思えます。

入学初日に履修要項を受け取ってから、私は履修計画作りに取り掛かりました。ですが、全カリ履修要項を「解説」するのは、とても難しいことでした。総合科目・言語科目ともカリキュラムが複雑で、履修できる科目も膨大にあったからです。目の前にたくさんの選択肢を提示されると、ついどれを選ぶのが「正解か」を考え、逆に何も選べなくなってしまうました。そして、1年次の時は履修できる学部専門科目も少なかったことから、「教養科目は早く終わらせて、専門科目に打ち込めるようにしよう」と思い、適当に総合科目3つを履修登録しました。単位を取りやすそうな科目も混ぜ、授業に臨む姿勢は真剣そのものとは言えませんでした。履修を開始してみると興味深い授業にいくつも出会い、「全カリ」の捉え方も変化していきました。

履修した全カリ科目の中でも、1年次前期で履修した『多文化共生と平和』という科目が強く印象に残っています。授業では、国際化する日本の現状やいわゆる在日外国人の労働問題を中心に学び、犯罪者として誤認逮捕された中東系実業家の方の話もお聞きしました。また、夏休みには群馬県・大泉町にあるブラジル人学校「日伯学園」を訪ね、外国人労働者の子供たちが直面する困難についても教えていただきました。

語学や文化に興味があり観光学部に入学した私は、必修の英語科目にも刺激されて、より「世界」を知りたい、留学もしてみたいと考えていたところでした。ですがこの科目を履修して、「世界」はこの小さな島国の中にも存在し、様々な差別や格差もまた確実に存在するのだと改めて気づきました。それ以来、私の興味は発展途上国の観光産業や先進国が抱える先住民問題などへも広がり、専門科目の履修もそれに沿ったものになっていきました。

私は、入学当初は教養科目と専門科目は別物と考えていましたが、この経験を通して、2つは切り離して考えるのではなく、教養科目の勉強を通して

得た視点や知識を持って専門分野の研究に臨むことが、より多くの気づきを得るために重要なことだと感じました。

大学としても、全カリと学部での学びを切り離して考えていない事を日々感じます。様々な場面で「全カリは全学部が支えるもの」という言葉を耳にし、教養科目と専門科目の学びを有機的に結び付けようという姿勢を持っているからです。仕事を進める上では、全カリは科目の提供や時間割の配置等で学部の協力を受けており、それ無しには成り立ちません。全カリ科目は履修対象者が全学生になることから、学部科目より優先される事もありますが、学部の協力があって初めて全カリが成り立つことを忘れずに取り組んでいます。

入職して全カリ・言語担当になった私は、また全カリ履修要項の「解説」を始めました。学生時代の経験があるので今度は容易に理解できるだろうと思いましたが、私が履修していた当時のカリキュラムはもはや古いものになっており、入学年度、所属学部・学科によりカリキュラムが異なるので、それを覚えるだけでもかなり時間がかかりました。加えて、2010年度の言語必修カリキュラム大幅改編、2011年度からの言語副専攻本格稼働による大幅な科目数増加もあり、その運営・準備についていくのはとても大変でした。同じ担当をしている教務や全カリ事務室の先輩職員の方々に何度も教えてもらいながら、何とかついていくといった日々が続いたのです。

その中で驚いたことは、職員もカリキュラムの改編に参画しているという事でした。会議では、たくさんの事を1つ1つ議論し、どういったことが実現可能なのかを検証していきます。学生時代の私は、先生方が決定したことを職員が実行していくのだろうと考えていたのですが、実際は、先生方が考えるカリキュラム案が事務として実現可能か、教務担当者にも意見が求められ、細かな実務の決定は職員が行います。このように協働して次年度の準備に取り組んでいくのは、意外だった所であり、やりがいを感じている所です。

その他にも、履修要項・講義内容作成や教室の調整など、学生の時は簡単に考えていたことや見えなかった様々な準備作業があり、昨年度末は時計をにらみながら必死に業務に取り組みました。途中、東日本大震災の影響もありましたが、何とか新学期を迎えられた時は安心感を覚えました。全学の教職員が協力して動かすのが「全カリ」なのだと感じた瞬間でもありました。また、言語副専攻科目にたくさんの学生から応募があったことは、準備に携わってきた者の1人として嬉しさを感じました。私が学生だったらぜひ履修してみたいと思う科目ばかりで、今後も多くの学生に語学の継続学習に興味を持ってもらえたらと思います。

私はまだまだ毎日が失敗の連続で、指導していただいている先輩職員なしには何もできない状態ですが、日々進化する全カリに携われることを誇りに思っています。今後も、学生に負けずに多くを吸収し、全カリ・言語を担当していると胸をはって言えるよう努力していきたいと考えています。

2011年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2011年9月現在

〈全カリ委員会〉

役職名	氏名	所属	
部長	青木 康	文 史	
副部長	藤原 新	済 済	
チームリーダー	新野 守広	異 異	言語チーム
	平野 隆文	文 文フ	総合チーム
運営センター委員	栗田 和明	文 史	文学部長
	池上 岳彦	済 経政	経済学部長
	家城 和夫	理 物	理学部長
	間々田 孝夫	社 現	社会学部長
	角 紀代恵	法 国ビ	法学部長
	村上 和夫	観 交	観光学部長
	松尾 哲矢	福 ス	コミュニティ福祉学部長
	山口 和範	営 営	経営学部長
	神田 久男	現 心	現代心理学部長
	一ノ瀬 和夫	異 異	異文化コミュニケーション学部長
	郭 洋春	済 済	教務部長

〈言語教育研究室〉

研究室名	氏名	所属	
英 語	主任 藤田 保	異 異	
	Allum, Paul H.	異 異	
	Caprio, Mark E.	異 異	
	Cousins, Steven E.	異 異	
	川崎 晶子	異 異	
	小林 悦雄	異 異	
	森 聡美	異 異	
	師岡 淳也	異 異	
	灘光 洋子	異 異	
	中谷 一	異 異	
	実松 克義	異 異	
	佐竹 晶子	異 異	
	高橋 里美	異 異	
	高山 一郎	異 異	
	鳥飼 慎一郎	異 異	
	山田 久美子	異 異	
	山口 まり子	異 異	
ドイツ語	主任 浜崎 桂子	異 異	
	新野 守広	異 異	
フランス語	主任 小倉 和子	異 異	
	石川 文也	異 異	
スペイン語	主任 飯島 みどり	異 異	
	佐藤 邦彦	異 異	
中国語	主任 細井 尚子	異 異	
	呉 悦	異 異	
諸言語	主任 石坂 浩一	異 異	
	イ ヒャンジン	異 異	
	新野 守広	異 異	* 1
日本語	主任 池田 伸子	異 異	

〈総合チームサポーター〉

	氏名	所属	サポートグループ	* 2
学部選出	加藤 磨珠枝	文 キ	人文学	
	山縣 宏之	済 済	社会科学	
	加藤 中英	理 化	自然・情報	
	村瀬 洋一	社 社	社会科学	
	早川 吉尚	法 国ビ	社会科学	
	韓 志昊	観 観	社会科学	
	芝田 英昭	福 福	社会科学	
	秋野 晶二	営 営	社会科学	
	香山 リカ	現 映	人文学	
	黒岩 三恵	異 異	人文学	
総長任命	長島 忍	理 数	自然・情報	
	林 みどり	文 文芸	社会科学	
	石渡 貴之	福 ス	スポーツ人間	
	Davis, Scott T.	営 国営	社会科学	
	林 もも子	現 心	スポーツ人間	
	浜崎 桂子	異 異	人文学	

* 2 サポートグループ
 人文学系サポートグループ
 社会科学系サポートグループ
 自然・情報科学系サポートグループ
 スポーツ人間科学系サポートグループ

〈言語教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏名	所属	
リーダー	新野 守広	異 異	
メンバー	藤田 保	異 異	英語教育研究室主任
	浜崎 桂子	異 異	ドイツ語教育研究室主任
	小倉 和子	異 異	フランス語教育研究室主任
	飯島 みどり	異 異	スペイン語教育研究室主任
	細井 尚子	異 異	中国語教育研究室主任
	石坂 浩一	異 異	諸言語教育研究室主任
	池田 伸子	異 異	日本語教育研究室主任

〈総合教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏名	所属	
リーダー	平野 隆文	文 文フ	
メンバー	下地 秀樹	講 教職	
	中島 俊克	済 済	
	上田 恵介	理 生	
	小池 靖	社 現	
	安松 幹展	福 ス	

* 1 言語チームリーダーの兼務

全カリニュースレター No.30	
印刷	2011. 9. 14 発行 2011. 9. 24
発行人	青木 康
編集人	石坂 浩一、平野 隆文
発行所	立教大学 全学共通カリキュラム運営センター
印刷	株式会社 プリントボーイ